
資 料

文化政策研究会報告及び今後への展望： これからの熊本の文化と文化政策

—— ルネッサンス運動を中心に ——

渡 部 薫

1. はじめに

2009年11月18日に熊本大学において文化政策研究会が開かれた。これは、地域の形成と文化との関係を、熊本という地においてより具体的な文化政策や文化運動を対象にして考えてみようという趣旨で、本学法学部の岩岡中正教授と筆者が企画したものである。なお、実施にあたっては、科学研究費「共同性の再構築に関する研究」（代表・岩岡中正）及び熊本大学拠点形成研究「将来世代学」（代表・高橋隆雄）の共催のもとで行っている。

熊本という地域から見れば、今日、新幹線の開通、熊本市の政令指定都市への移行という新しい具体的な状況に直面しており、そうした状況の中で熊本の社会経済的な発展をどう進めるべきかという課題が立ち上がってきている。しかし、より根底的には、私たちがこの地に生きるという文化的思想的課題が新しい時代状況の中でも異なる様相をまといながら問いを発し続けているということがある。この研究会では、このような課題に応えるためには、今、改めて文化政策・文化運動を熊本においてどう展開すべきかについて考えることが必要なのではないかと問うてみたのである。

そこで、文化政策研究の専門家として埼玉大学の後藤和子教授、文化運動の現場からは熊本における文化運動の中心的な役割を担っている熊本ル

資 料

ネッサンス運動の吉丸良治会長を招いて、文化によるまちづくりについての理論と運動の対話という形で、二人の報告を中心に研究会を構成したのである。研究会では、これに加えて、参加者として新聞社やまちづくりNPO、美術館、市役所の方々と交えて、質疑応答を含めて議論が行われた。

本稿では、研究会で行われた報告と議論についてその概要を報告⁽¹⁾するとともに、今後の熊本における文化運動や文化政策の展開に向けて簡単に考察を加えてみたい。

2. 研究会の報告及び議論の概要

研究会では、まず、後藤氏が文化政策研究者の立場から文化と地域経済の関係やフランス・ナント市の文化政策について報告を行い、続いて吉丸氏が熊本ルネッサンス運動に携わっている立場から運動が目指してきたもの及びここまでの経験について報告を行った。つづいて、二人の報告をもとに、他の参加者との間で議論が行われた。ここでは、それらの報告及び議論について概要を報告したい。

2-1. 後藤和子教授報告：都市における文化政策のあり方と可能性

後藤氏は、文化と地域経済に関して、次のように報告した。

まず、最初に、文化と経済の関係については、お互い相容れないものという見方もあるが、文化は文化的価値と経済的価値を持ち、文化的価値は経済的価値と相関しつつも、それとは別個のものとして存在すると見ることができる。地域経済と文化をめぐっては、80年代以降グローバリゼーションが進み、先進国において製造業が衰退することで雇用喪失や中心市街地の空洞化、犯罪の増加という状況を招き、製造業に代わって新しい産業のあり方や都市のあり方を考える必要が出てきた。そこで、都市のアイデンティティや魅力を高めて都市を再生するために、文化施設や文化イベント

文化政策研究会の報告及び今後に向けての展望：これからの熊本の文化と文化政策

の経済効果に関心が集まるようになった。これは、文化投資の短期的効果を狙ったものである。基本的には消費に基づくもので、これには直接的に生み出される所得と雇用という効果と間接的な乗数効果がある。これは乗数が大きければ効果も大きくなるが、文化への投資は他の活動への投資に比べて乗数が特に大きいものではなく、また変化もすることから当てにならないといわれている。

文化経済学ではそれよりも芸術・文化の長期的効果に関心がある。一つはロケーション効果というもので、地域の持つ文化的雰囲気や創造的な人々や企業、投資を惹きつけること、特に、小さなスタートアップ企業を惹きつけクラスターを形成することに有効であると考えられている。もう一つは、文化の持つ教育的・創造的価値で、アートは、イノベーションや創造のプロセスにインスピレーションを与える効果を持つ、あるいは、地域におけるアートや文化は、間接的に、よりイノベティブな産業発展を導く効果を持つと考えられている。アートはビジネスにとっても十分に経営資源になる可能性があるということである。このような文化の創造性を介したインパクトへの関心から、90年代に入ってクリエイティブ・シティという概念が登場してくる。2000年に入ってから、一つの大きな潮流ともなり、今では世界中で千以上の都市がクリエイティブ・シティを標榜しているといわれている。これは、人々に共有された価値観とか行動様式とか、慣習等の広義の文化の視点から都市をもう一度見つめ直し、都市のイメージを考え直し、地域資源を見直して、人々のエンパワーメントを図りながら社会的統合を目指そうとする総合政策的アプローチである。すなわち、文化政策、環境政策、交通政策、都市計画、教育政策、その他が結びついているような都市の政策的アプローチということになる。

1998年にスウェーデンのストックホルムで発展のための文化政策に関する国際会議というものが開催され、グローバル化の中での開発援助における文化の重要性が議論された。そこでは、途上国の開発・発展において文化は次の3つの点において必要であると論じられた。第一に、発展するた

資 料

めには、地域のアイデンティティが非常に重要であり、そのためには、地域の文化的価値の育成と強化が必要である。第二に、新しい制度を取り入れるにしても、その地方の伝統とか制度を配慮した方法を検討しなければならない。第三に、貧困層向けプログラムにおいてコミュニティを活性化し人々の自尊心を高めるための文化的正当性が重要である。途上国については、こうした議論の他にも、インドが映画産業において著しく発展していること、途上国の中にはハリウッドのロケ地になって目覚しく発展している地域があることに見られるように、知識経済というのが先進国だけではなく途上国でも非常に重要なものになってきているということがいえる。

次に、クリエイティブ産業については、リチャード・フロリダというアメリカの経済地理学者が「クリエイティブ・クラスの台頭」という議論を行っている。フロリダは、アメリカで発展している都市はどのような都市であるかを研究する中で、クリエイティブ・クラスの多い都市ほど発展しているという事実をつきとめた。クリエイティブ・クラスとは、創造的であるということが重要な要素となる職業の人たちを指すもので、現在の知識経済を支えている人たちである。すなわち、知識経済に基づいているような都市が非常に発展しているということを解析したということになる。フロリダは、企業を誘致して都市を発展させるという方法よりも、まず創造的な都市の雰囲気を作ってクリエイティブ・クラスの人を惹きつけることで人材を求めているハイテク企業を惹きつけたり、その人たちが新しいビジネスを起こしたりすることで都市発展を導くという主張を展開し、非常に大きなインパクトを与えている。ただし、フロリダの説には批判も多い。

さて、90年代以降の大きな変化として、グローバル化の中で都市間競争と連携という状況が起こっていること、知識経済への流れで知的財産という概念や知的財産法が重要性になってきていることが指摘できる。そうした中で、英国ではクリエイティブ産業は雇用や輸出に貢献するとしてブレア政権以降支援に力を入れてきた。ただし、どこの国でも財政的に厳しく

文化政策研究会の報告及び今後に向けての展望：これからの熊本文化と文化政策

補助金による文化の支援は難しくなり、文化への税制を通じた支援という流れになってきている。EUでは、文化へのVAT（付加価値税）は低税率になっている。例えば、オランダでは、一般的にはVATは19%だが、美術館の入場料は6%となっている。これは文化への投資と見なされているものだが、文化に投資することが経済発展にとっても重要であるということが認識されているということになる。もう一つ紹介したいのは、福祉政策の一つの転換として、貧困層への給付に代えて、教育を通じて高いスキルを持った労働力を育成し、それによって雇用を創出する方法にシフトしてきていることである。それ以外にも、例えばオランダでは、海外からの投資を増やすために、専門的で高所得の外国人労働者に対して所得税減税をしたり、オランダに立地する海外企業を増やし雇用を創出するために資本参加免税等を適用したり、という方法をとっている。

ここまでの結論として、結局80年代以降のグローバル化や知識経済化に置かれた都市や地域においては知識とか創造性から生まれるものが非常に重要になってきていること、先進国のみならず途上国の開発においても文化やクリエイティブ産業が重要とみなされるようになってきていることを主張したい。したがって、福祉や社会保障で不平等を解消してから、あるいは景気が回復してから文化に着手するのではなくて、文化が雇用創出をすると同時に副次的効果として魅力的な都市景観や文化観光を創出するなど、多面的な機能を持つことに着目して都市政策の総合化を考えるべきである。

最後に、文化政策の事例としてフランスのナント市の政策を紹介したい。ナント市は、人口28万人（都市圏人口80万人）、大西洋に面し、パリより少し南側、ロワール川の河口に位置する。かつて栄えた造船業や三角貿易が戦後衰退したが、文化を活用して再生に成功している。ここでは、市の文化予算が全体の14%と非常に大きな割合を占めている。ナント市では、できるだけ文化を文化施設の中に閉じ込めずに、街に出して、つまり芸術と都市文化の接点を作っていくことを狙いとしているため路上でパフォー

資 料

マンスをやったりするのを非常に大事にしている。例えば、ロワイヤル・ドゥ・リュクス(Royal de Luxe)という野外劇を得意とする劇団が巨大な人形を操作して街の中を動かすことで、誰でも目に触れることを可能にし、街の中に活気を生み出している。また、ナント市にある美術学校を取り上げると、ここの学生は、卒業生のうち2、3%ほどしかアーティストにならないが、大学在学中に他の経済系の大学と単位交換したりして経済学や経営学の単位を取って、デザイン会社やインターネットのwebサイトのデザイン会社のようなベンチャー企業を立ち上げるという形で産業の創出につながるようなことをしていることがよく見られる。これに加えて、ハイテク産業やバイオ産業等もあるため、産業が多様化しており、リーマン・ショックの影響は現在のところあまり受けていないようである。ナント市は、他にもフォル・ジュネというクラシック音楽祭や元ビスケット工場を現代アートの実験場として再生したリユー・ユニックでも有名である。また、現在では、かつての造船所の跡地をクリエイティブ産業の拠点として再生すべく再開発を行っている。以上のようなナント市の文化に関わる政策的な試みは、文化政策が交通政策や環境政策、都市計画や産業政策とうまく連携し、組み合わさることで実現し、都市再生につながっている。

2-2. 吉丸良治氏報告：熊本ルネッサンス運動が目指すもの

吉丸氏は、熊本ルネッサンス運動が目指してきたもの及び活動内容について次のように報告した。

まず、運動の形成は、福岡で九州国立博物館が開館するとき、永青文庫が展示資料の対象となったということがある、これが契機になって永青文庫をどう位置付け、熊本に定着させるかについての検討を行ったことに始まる。熊本には永青文庫などの細川の文化をはじめとして伝統文化、歴史的遺産がたくさんあるのに地元で意外に知られていないため、これらをしっかり位置づけ、熊本の魅力の再発見につなげていくことが必要であるという認識に至り、2004年3月ルネッサンス県民運動を立ち上げることになっ

文化政策研究会の報告及び今後に向けての展望：これからの熊本の文化と文化政策

た。

運動では、第一に、「肥後学」の復興と永青文庫の活用を行うこと、第二に、歴史の見える、魅力のある街づくりを目指すこと、第三に、賑わいの熊本創造を目指すこと、という目的を設定し、具体的に動き出していくことになった。経済、文化、熊本大学等、各界から参加者を募り、現在では800名に上っている。

当初行った活動としては、熊本の文化、なかでも加藤の文化、細川の文化をもっと知ろうということになり、肥後学講座や永青文庫の古文書が十分に活用されていないということで古文書を読める人材を育てるため古文書講座を開講してきた。他方で、この文化運動をもっと広めるために具体的に実践的に行動する必要があるということで、3つの部会を作った。一つは、熊本の祭りを考える部会、二つ目は、坪井川を生かす部会、三つ目は、熊本城を生かす、利活用する部会、である。

第一の部会については、具体的な展開として「みずあかり」の祭りの活動がある。熊本大学や学園大学、崇城大学の学生や自衛隊等から2000人程のボランティアが参加し、さらに市役所や県庁も加わって、祭りとして成長してきている。第二の部会では、坪井川の熊本城から駅の前までの2.8キロを船で往来できるようにしていくことを目指している。城で園遊会というセレモニーを何回も開催しつつ、機運を高めながら資金を集めているが、次第に市民の協賛が増えてきている。市民の中にいい町を創ろうという意識があることを実感している。実際の舟の運航については、行政の協力がなければ進まない。当初は、行政からは安全面の問題を理由に相手にされなかったが、現在では、技術面の問題で大きな支援を得ている。実際に船が運航することになった場合の運営主体については地元である新町のまちづくりNPOが手を挙げているが、ルネッサンス運動としてもサポートしていきたい。この動きは、西南戦争、第二次大戦という2つの戦災で城下町をほとんど失ってしまった熊本の城下町としてのイメージを高めるために非常に重要だと考えている。第三の部会では、熊本の歴史回廊「く

資 料

まもと魅力発見の旅」というのを作り、熊本市内7コース、県下17コースを設定して、熊本日日新聞社の協力も得て行っている。非常に人気があり、募集を行えばその日のうちに埋まってしまうくらいである。

永青文庫に話を戻すと、東京からの資料の里帰りの受け皿について県と協議してきたが、その結果として、2008年4月に、県立美術館の横に永青文庫の常設展示館を設置するとともに、熊本大学にも設置することになった。古文書の解説や美術品の補修・調査に対しては、肥後銀行から寄付をいただき、その資金によって熊本大学で永青文庫研究センターを立ち上げ研究を進めるとともに、県立美術館では文化庁や国立博物館と協力しながら調査を進めることになった。

以上、このような運動を通じて、多くの人たちの協力を得ながら、熊本の文化が一つ一つ発掘されることによって、その魅力が発信されていくことになるのではないかと考えている。

2-3. 主要な議論

以上の報告を受けて、参加者から、そして報告者との間で次のような議論が行われた。

第一に、まちづくりにおいて計画性や核的な存在の必要性、民の知恵が重要であることが指摘された。これについて熊本では、計画性の欠如や民が薄くて官が中心であることが問題であるというのである。第二に、文化を誰がどこで守っていくかという問題を考える必要がある、という意見が提示された。それに対して、吉丸氏から、ルネッサンス運動としては熊本に関する貴重なものは熊本で見る、という体制を築いていきたいと考えていると回答された。

第三に、文化は内的志向、伝統志向だけでは、市民や一部の人たちだけにしか訴えられない、全国あるいは世界への広がりを視野に入れる必要があるという指摘があった。それに関連して、第四に、もっと夏目漱石やラフカディオ・ハーンのような熊本に関わる固有名詞を活用するとともに、

文化政策研究会の報告及び今後に向けての展望：これからの熊本の文化と文化政策

それを支える活動を行っている人たちを浮上させて熊本全体を全国にアピールする必要があるのではないか、という主張が提示された。第五に、行政も含めて、文化に予算をもっと投じるべきではないかという意見が提示された。

第六に、熊本をどのような町として文化発信するのか、文化発信するためには統一的な町のイメージがあった方がいいのではないかという質問があった。これに対しては、吉丸氏から、ルネッサンス運動としては歴史文化豊かな近代都市というコンセプトを持っていると回答された。また、熊本市としては、「湧く湧く都市くまもと」というキャッチフレーズを作ったが、明確に何の都市であるというイメージは特に持っていない、との説明があった。これについては、さらに、都市のイメージ構築は市民の地域アイデンティティの形成に関わるものであるため、これだと上から決めるのではなく、時間をかけて市民の間で議論をしていくことが必要なのではないか、という意見が提示された。第七に、リチャード・フロリダの「クリエイティブ・クラスの人たちを引き付けることによって企業を引き付け、都市を活性化させる」という主張に対する後藤氏の見解が求められ、それに対して、日本ではそのような方策をしても東京には勝てないため、他の地域では既に住んでいる人たちがクリエイティブになっていく方が現実的ではないか、との見解が示された。

第八に、ルネッサンス運動とその周辺で起こっている運動を、どういう長期的見通し・全体の計画の中に位置づけていくのか、自分たちが行っている文化活動がどのような関係性・波及性を持っているかということが重要ではないか、この関係性・波及性の実体を明らかにすれば、住民や経済界からの支援も得られるようになるのではないか、また、今回、このような大学の場において各方面から参加者があり重要な関係性が生まれてきているということについて認識を持つ必要があるのではないか、という主張が提示された。これに対しては、ルネッサンス運動等の文化活動が行っていることを大学の研究者が客観化し、理論化し、政策提言につなげていき、

資 料

行政もこれを真摯に受け止めることで、運動と大学と行政という三者の連携が形成されることが非常に重要ではないかという意見が付言された。第九に、これに関連して、それぞれの活動は自分たちの活動で精一杯であるため、活動間の繋がりを持たせるプロデューサー的な役割がどこかに必要であり、その点においてルネッサンス運動はそのような役割を期待できるのではないか、また、大学という、公平性を持ちどこに対しても等位置にある場に行政も加わり、民間も加わることで、色々なまちづくり活動を統括し、熊本をどうもっていくかについて考える拠点を作る必要があるのではないか、という意見が提示された。

最後に、後藤氏から、現在多くの都市がクリエイティブ・シティを名乗るようになってきているが多少本質からずれているところが見受けられる、熊本ではそれよりも熊本でなくてはならないものをこれまで蓄積されてきたソフトの中から見つけ出してイメージとして掲げる方がいいのではないかという意見が提示された。また、文化政策は文化担当部局だけではなく、商工関係や都市整備関係等と一緒に行動することによって発想も変わり、広がりが出てくるのではないか、という提言がなされた。

3. 研究会を振り返って： 熊本における文化運動及び政策の今後の展開に向けて

今回の研究会は、冒頭でも触れたように、地域の形成と文化との関係を熊本という地において具体的な文化政策・文化運動を題材にとって考えようという趣旨で、熊本ルネッサンス運動を中心に今後の文化運動や政策のあり方・進め方、文化に関わる様々な活動や関係者間の関係のあり方について検討したものである。報告及び議論の中でこの問題について今後の展望を開くような意義のある事例や考え方・主張を見ることができた。報告及び議論の内容については上述したので、ここでは、これらを踏まえて、

文化政策研究会の報告及び今後に向けての展望：これからの熊本の文化と文化政策

熊本という地域における今後の文化運動や政策の展開において検討すべき点について簡単に考察してみたい。

まず、熊本の現在の文化運動の中心となっているルネッサンス運動の目的あるいは意義について考えてみたい。これは、A. 地域の固有の資源としての熊本の文化を守り伝えること、B. それを通じて地域アイデンティティを活性化させること、C. 地域アイデンティティの活性化や具体的な文化活動を通じて地域の活性化につながる地域づくりを行っていくこと、の3点に解釈・整理できる。一般に文化の持つ価値として、①それ自体の持つ固有の価値（歴史的価値、美学的価値等）、②精神的・象徴的価値、③社会的価値、④経済的価値、を挙げることができる。①は、何かの目的に資するというのではなく、それ自体において意味を持つ自己完結的な価値であるが、②、③、④の価値は、文化の持つこの固有の価値があつてはじめて生まれるものであるということが出来る⁽²⁾。同様に、ルネッサンス運動のAという熊本の文化の持つ固有の価値を守るという目的（文化の価値のうち①に該当）を追求する活動は、B（③に該当）やCの基礎になっているといえよう。ルネッサンス運動は、この点において永青文庫をはじめとして熊本の文化の発掘、保存、そして活用に努めるという地道で貴重な活動を行ってきたと評価することができる。

さて、検討すべきは、運動の目的のうちCの展開の仕方である。地域内の様々な活動との関係については、ルネッサンス運動では地域の文化を活用して熊本の活性化につなげることを最終的な目的にしており、そのために多くの事業において数々の団体と協力、連携、あるいは支援という形で関係をもってきた。ルネッサンス運動は熊本の文化活動の一種の中核的な役割を果たしてきたということがいえよう。このことは大いに評価できることである。また、議論において指摘されたように大学は重要な拠点機能を果たす可能性を持っており、ルネッサンス運動がこれまで築いてきた関係のネットワークをさらに発展させる可能性が期待される。しかし、このような運動が熊本の社会経済の発展に大きなインパクトを持つためには、

資 料

活動の主体間においてより創造的な関係が形成されることが必要ではないだろうか。例えば、創造都市論が論ずるように、一つの主体に生まれた創造的な動きがそこだけにとどまるのではなく、都市内の関係のネットワークを通じて他のアクターに伝わり、それを受け取ったアクターが、それを加工したり、代替するものを創り出したりして、さらにそれが他のアクターに伝わるという形で創造性の連鎖が形成されているならば都市内の創造性は大きなものとなる。ある主体に現れた創造性という振動が他の主体の振動を誘って、主体間で共振することで地域全体を振動させるということになる。一種の自己組織化である。この創造性とは、特別なもの、特段にイノベティブなものとして捉える必要はなく、活動上に現れた創意・工夫や人にちょっとした感動を与えるような取り組み姿勢などでもいいのである。このような創造性を伝え拡大させる構造が熊本の文化活動のネットワークの中に必要なのである。その点においてルネッサンス運動の持つネットワークは重要な基盤であり、この上に立って創造性を伝え拡大させる構造をどう模索していくかについて検討していくことが重要ではないであろうか。

もう一つ指摘すべきことがある。ルネッサンス運動が基本としている熊本の過去の蓄積を大切にすることは、前述したように文化の持つ社会的価値や経済的価値などを生み出す基盤を形成することになり、評価すべきことであるが、それに加えて未来志向性をもう少し積極的に打ち出すことを検討すべきではないだろうか。今後の熊本の発展を考えると、新しい文化の動きに結びつけるような展開が必要ではないだろうか。また、文化がやや一部の人たちの享受にとどまっている感がある。もっと広く多くの市民に享受されることが必要ではないだろうか。これは、活動の仕組みの問題もあるが、活動の対象とする文化をどうするかという問題でもある。対象を広げ、現代の新しい文化も含めることで文化運動がもっと市民的な広がりを持つものになるのである。このような未来志向かつ対象の拡大という展開は、ルネッサンス運動のネットワークの多彩で厚みのあるメンバー

文化政策研究会の報告及び今後に向けての展望：これからの熊本の文化と文化政策

構成を考えた場合、そして今後連携が広がりネットワークがさらに拡大していくことを考えた場合、前述したような文化の持つ経済的価値を引き出すような、具体的には文化産業のような新しい地域産業の創出・育成につながっていく可能性も考えられるのではないか。

金沢市を例にとると、金沢市は2004年に21世紀現代美術館を開館させたが、ここでは、金沢の伝統工芸や伝統芸能とファッションや現代アートとの融合を図り、その中から地域の新しい現代的な文化産業を創出・育成する試みを行っている。また、この美術館では、街を文化によって活性化させることに関心を持ち、市民、特に子供たちに現代のアートに触れさせ体験させ、そこから何かを自分なりに体得させることを目指している。このような試みは、前述した文化の持つ精神・象徴的価値が引き出されて活用されている例である。個人は文化を享受することによって何らかの意味を獲得、あるいは生産するのであるが、前者の新しい現代文化産業を創出・育成する試みは、そのような意味の生産を専門家において具体的・実用的な目的のための創造的行為につなげようとしているのであり、後者の市民に現代のアートに触れさせる試みは、市民の創造的ポテンシャルを高めることにつなげようとしているのである。もちろん、足元を見すえなければならぬ。文化に対する取り組みにおいて先進都市である金沢市を例に出すことは問題かもしれない。しかし、文化の持つ今日のポテンシャルの大きさ、そしてその社会への影響力が増大していることを考えた場合、未来に対する取り組みを視野に入れること、文化を享受する人たちを拡大することで活動を広げていくことはどうしても必要なのではないだろうか。もちろん、ルネッサンス運動にばかり期待するのではなく、そのような動きをどこかを起点にして展開していくことが望ましいといたいのである。そして、その場合、ルネッサンス運動はその重要な媒体になると考えられるのである。

全体的にはルネッサンス運動を中心とした熊本の文化運動は様々な人々や活動が参加して具体的な事業を伴いながら発展的な方向に展開している。

資 料

今回の研究会では、これまでの展開が熊本の文化や地域社会に果たしてきた役割を再認識するとともに、今後の展開に向けての課題について検討することができたということが出来る。研究会の中で出てきた議論を踏まえて熊本の文化運動がさらに発展していくことを期待したい。

〈注〉

- (1) 文化政策研究会の詳しい報告については、「文化政策研究会報告書：これからの熊本の文化運動と文化政策——ルネッサンス運動を中心に——」が別途発行されている。
- (2) ②精神的・象徴的価値は個人において生じる価値であり、個人が文化を享受／消費（解釈）することを通じて何らかの意味を獲得することに関わるものである。この文化の享受者／消費者の行為は、積極的に見れば意味を生産していることになり、創造的な営為につながるものである。③社会的価値は、社会的な意味を持つ価値であり、アイデンティティや誇り、連帯感を生み出す・支えるような作用、あるいは、コミュニティへの教育的な作用を持つ価値である。④経済的価値については、①、②、③の価値が市場性を持っている場合に生み出されることになる。

なお、文化の持つ価値についてのこのような整理は、スロスビー（Throsby, D., 2001, *Economics and Culture*, Cambridge University Press (= 中谷武雄・後藤和子監訳、2002年『文化経済学入門——創造性の探求から都市再生まで——』、日本経済新聞社)を参照している。

文化政策研究会の報告及び今後に向けての展望：これからの熊本の文化と文化政策

文化政策研究会の実施概要

主 催：熊本大学拠点形成研究「将来世代学」・科学研究費「共同性の再構築」（共催）

企 画：岩岡中正（熊本大学法学部教授、熊本ルネッサンス幹事）

渡部 薫（熊本大学大学院社会文化科学研究科教授）

テーマ：これからの熊本の文化と文化政策——ルネッサンス運動を中心に

形 式：公開

日 時：11月18日（水）10：00～12：00

会 場：熊本大学内くすのき会館

参加者：後藤和子（埼玉大学経済学部教授、文化経済学会副会長（当時）；報告者）

吉丸良治（熊本ルネッサンス会長、熊本県文化協会副会長；報告者）

西嶋公一（熊本まちなみトラスト会長）

高峰 武（熊本日日新聞論説委員長）

吉住 修（熊本市役所企画課）

岩崎千夏（熊本市美術文化振興財団）

渡部 薫（上掲）

岩岡中正（上掲；司会）

その他参加者30名

進 行：

①10：00～10：30 報告「都市における文化政策のあり方と可能性」

後藤 和子

②10：30～10：50 報告「熊本ルネッサンス運動が目指すもの」

吉丸 良治

③10：50～12：00 フリーディスカッション

上掲参加者